

イギリス的な情景

— the scenes in Britain —

早稲田大学 教授
小田島 恒志

(第23回)

集合住宅

大学の用事で久しぶりにイギリスへ行ってきた。2日間で3つの大学を訪問する強行スケジュールのため、あまり新しいイギリス的情景を満喫する暇がなかった。持ってきた古いポンド紙幣がことごとく使えず、銀行で変えなければならなかったことぐらいだろうか。

そうした中、1つだけ、目に焼き付いた光景がある。空港へ向かうタクシーの窓から見た、あの六月に起きた悲惨な火災の現場である。真っ黒に焦げた高層アパートが青い空を背景に悲しく佇んでいるのを見て、言葉を失った。

当初、日本ではロンドンの「高層マンション」と報道され、日本の高層マンションと比較して防火設備の劣悪ぶりを解説するニュース番組もあったが、後になって、実は、低所得者層の暮らす集合住宅であることが伝えられた。日本の高層マンションとはもともと事情が違うのだ。しかも、このアパートはケンジントン&チェルシー地区という、住民の平均所得の高い地域に建っている。「平均」が高いのは、多くの高所得者がいるというだけのことで、こうした集合住宅に暮らす人々にとっては、平均所得の高い地域と言うより所得格差の大きい地域という感覚だろう。

M.スパークの短編小説に「あの散らかりようを見せたかったわ」という話がある。若い女性が、

いろいろと身の回りの出来事を語っていく物語だが、読んでいくうちに、どうやら彼女は低所得の家庭で育ちながらも、両親から受け継いだ「きれい好き」な性格を誇りに思っていて、自分の判断基準で他者を批判していることが分かってくる。「〇〇中学は勉強はできるかもしれないけど、校舎内がひどく汚くて、ああ、あんな学校へ行かなくてよかったわ」とか「××さんの奥さんはいい人なんだけど、子供に向かって□□なんて言葉を使うのはどうかと思うわ」といった具合に。「あの人はお金持ちなのに、家の壁に絨毯が掛かっているなんて、あれはきっと壁の染みを隠すためね」という台詞からは、ははあ、この子はタペストリーで壁を飾るという（裕福な家庭の）習慣を知らないのだな、と推察される。

ある日、親しくなった医者一家に連れられて、ロンドンの中心にある彼らの友人のフラットを訪れたときにこういう — 「このフラットは、エントランスもきれいで素敵なんだけど、ウェルフェア（福祉）センターがついてないからダメね」。ウェルフェアセンターは住民の交流と生活支援を図るために、主に低所得者層が暮らす公共集合住宅に設置されているものだ。それがついていない、ということは、「ダメ」なのではなく、恐らく、「高級マンション」なのだろう。